

特56

903

美おの志くれ

087579-000-8

特56-909

美おの志くれ

多田 立意/編

M26

DBE-0962



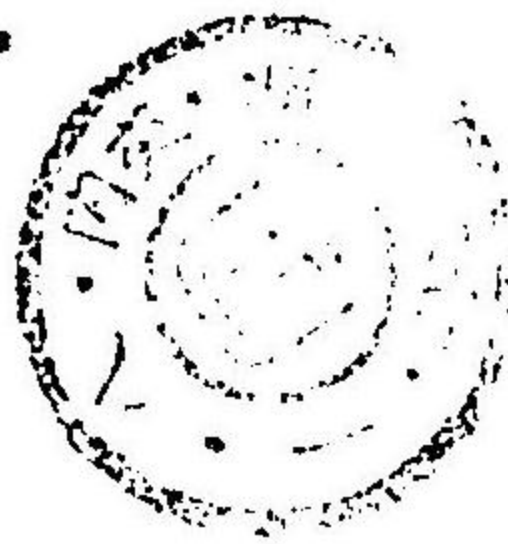
特56

90

餘錄



澤天



和名己暢月中澣日
升舟みお古之志宗匠
清海

七十老人流之為善題



○

實に榮枯盛衰の理は風雅の道も亦免れ難きものよやそのうと徳川の治下
小ていたく世お持難され去俳諧を明治の初期物事西洋風おみ傾き御國
振の衰ふるお隨ひて斯道は志を人々之しく成行き一時の世は廢れなんと
する有様なりしか近年又を古お復りて漸々隆運の兆あるいと云く
喜えしき限りあり殊お本年を俳祖芭蕉翁の二百回忌お相當するとして四
かの雅士連思ひくの催ありて翁の遺徳と慕ふのからか名古屋市

よ於ても竹林居立意宗匠これの主人となりて追善の筵を開かれ俳諧並よ
手向の献詠と輯めて廣く同好の士お領つの企てあり幸ひ宗匠か多年心と
籠めて取調へたる尾張國なる翁の舊跡及び斯道古人の履歷等とも添へて

一綴の印刷物となりよきこれと翁の爲をふた千部萬部の經典讀誦よりも
ろの功德まさるなむめれ頃日宗匠のおれか緒言せよとひらるれ思の
儘を斯くいある一つ

明治二十六年癸巳十一月

夢笑道人拜草

日の光り洩れて尊し初時雨

芭蕉翁尾張國舊跡

多田立意

千鳥塚

はし崎の闇を見よとやなくちどり

舊名星崎といふ所なり今はあらる村の田中に在鳴海の星崎もひと
くるいにして鳴海の驛の長者姓下郷と稱し俳名知足と云右翁眞跡
い下郷氏か所藏なり外にも翁所持の頓阿法師の作の木彫の人丸の
像并鑄物にせし唐物茶箱木綿の風呂敷二たすみの端に大道長安又
片方にい深川芭蕉庵と墨にてあるしたる品も所藏なり此外にも眞
跡數あり。知足か分家下郷金右衛門の新宅の賀にとはし書ありて

よき家や雀よろこぶ脊戸の粟 此眞跡も所藏の由此家をは雀
踊庵と唱ふなり知足かあみし千とりかけと云集冊世にあり今も家
榮て俗に千代倉とも人の唱へける

三日月碑

あるとあるたとへにも似す三日の月

成就院の歸るさにと前書あり所は名古屋大會根町坂上にありて天台宗なりしに今ハ了義院となり日蓮宗に改む爰に五條坊か碑を建て五十年忌を營む曉臺ハ一字を建立して百年忌をつとめ鶴更これを修繕して百五十年忌をどふ其一字雨風に崩れ更にかたちなきとおのれ立意なけき俳士の賛成を乞ひ門人のはたらきをも得て新たに一堂を建立なし俳祖の二百年忌を營む俳士集ふて大なる事俳祖尊き徳になん

水鶏塚

水鶏なくと人のいはゝや佐屋泊り

塚は尾張海東郡佐屋村の内にあり右吟の眞跡は隣村なる松菜村佐野治右衛門方に所藏なり

粟稗の碑

粟稗にまつしくもわらず草の庵

尾張西春日井郡杉村臨濟宗解脱寺ハ竹葉軒の吟なり住職長虹は翁の門人にて此寺に宿り俳諧數ありし所なり

苜跡の碑

かりあどや早稻かたくの鳴の聲

名古屋巾下新道町眞宗田中山法藏寺に在而後の頃に碑立かりあど集といへる集冊世に出てたり

桐葉

此海にわらんし捨ん笠時雨

桐葉のぬし志淺からさりければまはらくと、まらんとせしに

熱田大神奉納

前書あつたの修覆

磨直す鏡も清し雪の花

近頃改造に相成伊勢大神の同様に宮造有て迎座あり

風月堂 いさ出ん雪見にころふ處まで

名古屋本町一丁目に住長谷川孫助俳名夕道と云書林也○書林風月
とき、其名やさしく覺へてきはし立寄て休ふうち雪の降出ければ
どの前書あり

笠寺碑 笠寺や漏ぬ窟も春の雨

尾張愛知郡笠寺村笠覆寺觀音奉納の句なり今村名改たまり千窟村
とか云ふ寺は眞言宗大須眞福寺元末寺

○

芭蕉堂 名古屋下茶屋町禪宗黃檗派東輪寺にあり枇杷園士朗建
立なり肖像徐延年の作なり開眼正式俳諧の發句 眼もはなも

ひらかせたまへ梅の花 士朗

同 尾張愛知郡熱田菖蒲池町眞言宗彌勒院在建立主僧桐葉
の末流の由に聞ゆ堂宇破損せしをもてかのれ立意これを修繕なし
二百年忌をいとなむ

同 愛知郡鳴海宿佐久町頭護山如意寺在りて下郷氏一族の
旦那寺、一撮園士前建立の由

丈草 行灯へ飛や袂のきりくす

内藤氏尾張丹羽郡成瀬侯の藩士委敷は俳稀人談にあり

杜國 蓬萊や御國のかさり檜山

名古屋鹽町に住み銚屋平兵衛と云ふ後に三河國渥美郡伊良子島村
に住み萬菊丸と稱す

越 人 つゝみかねて月どり落す霞哉

肥後産細川家臣佐分氏一旦浪人して濃州在露川等の招きにより名古屋に來り桑名町一丁目に住し歸參叶ひて熊本へ歸る

野 水 見る物とかはへて人の月見哉

名古屋益屋町岡田佐治右衛門備前屋と号し醬油製造を業とせり

荷 兮 首出して岡の花見よ蛇どり

山本太一名古屋堀詰町に住み舍弟に冬文と云あり

重 五 おどや先氣のつく野邊の郭公

加藤善右衛門と稱し材木商川方屋と云名古屋材木町に住す

露 川 築山のそなへや雪の猿投山

澤市郎右衛門月空居士と稱し伊賀上野産にして翁と竹馬の友の由

澤家へ養子に來ると聞此家未名古屋本町六丁目に藤屋と號して金
蘭其外表具等品々和小間物類を商ひ今盛んに榮て在り翁眞跡
蓬萊に聞はや伊勢のはつ便 (此軸秘藏せり)

五 竹 坊 鎌倉や竈の先のさしの聲

姓名不詳名古屋前津香久連里に住と傳へり慮元坊門人

蓮 阿 坊 秋の夜のまことを麿の鳴音かな

姓名不詳反喬舎と號し木因門人なる巴菫の門人なり名古屋京町に住す

一 筆 坊 松竹やそれから梅の正月よ

姓名不詳隅沙と號し蓮阿門人にて点式を受し人なり名古屋久屋町に住す

也

有

人の撞鐘と思へす秋のくれ

尾張家の老臣なり祖父も野有と稱し季吟の門人の由也有は祖父を師として學ひ門人を持ぬを見識となし俳文に長じうつら衣前津七景などの作あり名古屋片端町屋敷構横井孫右衛門と唱へ千五百石を領す

曉

臺

米くれる人にはそれて花に鳥

運阿門人加藤平兵衛と号し尾張家藩士右筆役をつとめ江戸定府たり市ヶ谷御長屋に住しある時俳諧の夜會に行き時を移し御門限後に歸り入事を得ずして空しく門下に一夜を明し翌日御門のあくを待て入りて住所の床柱に前記の一句を短冊に書て張付け御屋敷を脱走なし陸奥の福島にて一とせ斗あそひし後ち名古屋に歸り久村

吳市と名をかへ俳諧專になしけるうちに尾張家九代の太守源明公事柄を聞辨へ給ふて召出して復舊せしめ自手御紋服の羽織を給ふに再松島行脚思ひ立江戸を初め野奥羽越加を巡り京都に入り二條家に召され花下を命せられたり是蕉門復古の人なり二條家より昏雨巷と書し明人の額面下賜り昏雨巷と稱し名古屋前津に住ひ龍門とも号し後男臥央に家を譲り又京へ上り門人延壽丹のむかへは木屋町五條上ル所松屋久兵衛方に寓居其後姉小路鉄屋町東へ入に移住し又鉄屋町三條上ル所へ家を替り寛文四年正月廿日疫痢疾にて死す京寺町四條上ル大雪院に埋葬す名古屋伊勢山町洞泉寺に士朗墓を立る

臥

央

冬枯や山にひつゝく人の影

曉臺男子昏雨巷と稱し前津龍門亭に住み後桑名町住居せり

士 朗 つくく〜と見て居ればちる櫻かな

井上仙庵朱樹夏枇杷園と号し名古屋新町に住す尾張春日井郡守山村の某より養子に來り醫は京都増田因輔に學ひ俳諧は曉臺の門に入りはしめは支朗と名のり書は長寄范古に學ぶ俳諧の名人なり

岳 路 雲霧にうきたつ花の深山哉

名古屋針屋町眞宗乘西寺住持野呂瀬秀圓と稱し枇杷園門人なり

羅 域 頭巾着て人先に乗る渡しかな

名古屋駿河町眞宗光蓮寺住持にて枇杷園門人

少 汝 清瀧の流れ出たりさしの聲

名古屋本重町眞宗淨瑞寺の住持にて枇杷園門人

桂 五 手の皺をさする花見の宵寝哉

尾張藩士新道町住金森鹿助とて枇杷園門人

梅 間 買ふたゝけあふひて余る團扇哉

尾張の藩士岡田保十郎梅花園と号し枇杷園門人名古屋主税筋に住す

金 谷 春の夜のたゝ内外のなかりけり

名古屋住吉町住姓名不詳修験にして書に名高き斧道人と号す

秋 鷹 買物に出れば雲雀も鳴日かな

姓名不詳侘殿と稱し圃丈とも云ふ桑名町一丁目住一筆坊門人なり妻もいははと唱へ俳諧す

松 兄 なかき夜や竹の村雨松の風

名古屋島田町眞宗正覺寺住持にて枇杷園門人なり

竹 有 春雨の中の月夜や軒の山

姓名不詳大鶴庵と号し塊翁とも唱ふ枇杷園門人にて名古屋桑名町に住す

晉 路 那智黒の小砂利を踏は時雨ける

姓名不詳二條家宗匠免許を受く臥央門人にて暮雨菴の相續して点式を繼ぎ名古屋鍛冶屋町住す

月 底 初秋に續てられし初月夜

里村逸八蓼光庵と号し尾張藩士名古屋臺所町に住す大鶴庵門人なり

沙 鷗 飯時にひとりも居らす桃の花

名古屋戸田町住中野治右衛門井桁屋と稱し酒造を業とす竹有門人

黃 山 ひる過てついで着るふれる拾かな

吉原清左衛門竹意庵と号し尾張家藩士名古屋天道町住枇杷園門人なり

さ ぶ 起て見れぬ萩にぬれたり庵の壁

姓名不詳尾張藩手代職名古屋流川町に住し俳學長たり百人一首の講義をも能くす

免 農 萩ふくや冬ほど冴て夜の月

大熊善兵衛銀杏園と号し尾張藩士名古屋長久寺町に住す枇杷園門人

而 后 大降や朝顔剪ていけしあど

伊藤喜兵衛味噌油製造家にて錢屋といふ名古屋萱屋町に住む大鶴庵門人

芝 石 行灯をとられて隙な巨燧かな

西川勘治帯月庵と号し福田新田の人名古屋長島町一丁目に住し後千里亭と号す

棗 地 うしろ手の古き姿よ夕さくら

服部林右衛門愛知郡下一色村の人巾下六句町に住す芝石門人

欣 當 枯芦のまた捨かたき葉音哉

下田喜平治木挽町一丁目に住し薪炭商紀の國屋と号す沙鷗門人

鶴 叟 咲そめるかた萬よし梅の花

竹村氏止丘軒と号し名古屋片端坂下町に住す始は伊勢椿堂に隨ひ

夙やと唱へ後蒼乱執筆たり

延寶頃より明治迄尾張の國俳人の有名數あれども爰に略す

○

明治此方の故人之部

梅 裡 松山にはしりとまりぬ時雨雲

沙鷗門人にて大橋甚藏明荷屋と号し紙類疊表商巾下樽屋町に住清園の号あり

士 前 いつの事のやうに思へは初時雨

大鶴庵門人愛知郡あらい村の長永井松右衛門隱居名古屋長島町に住一撮園又天目軒の号あり

三 楓 ちゝまりし日脚見よどや散霞

甫

黃山門人大野紋七郎名古屋上宿役割町に住

ひすふ手の底につかへる清水哉

靜

黃山門人黒田立軒第一樓とも稱す名古屋洲崎町に住

處 草の石の氷のうへの掃除かな

芝石門人大木重治郎末曉庵愛知春日井郡西枇杷島に住ひし屋と号す

醉

雨

秋風の眼にこそ見へぬ水の皺

黃山四男吉原東海と号し父竹意庵を次下園町に住

來る秋のむけ直一鳧風見鎌
すゝむらの聲光る也闇の庭

東京

其

鳳

鳳

羽

加茂川や晒せる布の色寒し
青柳や雨にゆるみの付日從
紫はゆかり清きは花をみれ
はつ日さす山や心のゆき處
久方の影うるはしき茂り哉
たらて足る旅の調度や更衣
朝心萩にひくるうねり哉
面白き野邊には成ぬ草の花
野中にも市にもはまる柳哉
氣安さや取灯置ねは虫も來を

竹

堂

素

石

素

水

永

機

魯

堂

伯

志

箭

浦

採

花

青

宜

金

羅

紅葉にも倭こゝろの櫻かな
 望まると井の水遠く月の庵
 朝涼し堀出の鶏の羽風より
 夏の夜や浮世のたつも此葉
 櫻の實茶盆の上に飜れけり
 暑いとは心からなり秋の空
 怠りのなきわか草の心かな
 魚賣の葬ほめておろしけり
 道連の氣儘の見ゆる花野哉
 撫子や愛相にくほす花の露

下總 旭 齊 雄
 岩代 壯 山
 乙年女
 湖心
 逸窓
 和親
 年山
 青鶴
 盡誠堂

螢見や娘り友もあつかりて
 有ふれた聲花と初からす
 十六夜の闇や朝顔覗くころ
 睦しき並ひやうなり雪乃家
 夜の更て露にも音や草の庵
 雨ならて風に太るや春の水
 蝸牛も搔出されたる落葉哉
 達摩忌や盥にさまる雨の音
 皆低い家造らしやゆきの里
 木の葉程高うもとはす鶴鶴

忍 山
 袋 蛸
 越前 甫 山
 陸中 芳 洲
 南 岬
 後志 黒 雨
 不 争
 羽後 唼 風
 月 静
 上野 桑 古

あれにいつ花の咲く雪の木
 是而已は散も愛たし稻の花
 中々に暑い日のあり秋の風
 椎の實を拾うてぬる時雨哉
 入月の後やひそかに花と水
 めい月や人よりむしのおとなとき
 家の棟は隠し課せぬ昔かな
 氣の付て見れば盛や枇杷の花
 うかくと寒さわすれて朧月
 あかるさや時雨過行小松原

乙 瓢
 峨 琴
 信濃 龍 孫
 凌 冬
 其 殘
 翠 艾
 越後 尤 儀
 晴 雲
 木 甫
 葉 磨

炬燵から覗いて見ても雪見哉
 日々に見て趣かはる紅葉哉
 霞にも紅さこのほる旭かな
 馬道も近みちも皆花野かな
 石におくはたか灯や菊の花
 酢の物の匂ひも淋し雨の月
 風邪聲は殊勝にも又はち叩
 花に利く庵の灯や置はなし
 名月の空はく箒なかりけり
 聞とても秋賑はしや渡る雁

鶯 春
 青 斧
 天 江
 文 隰
 流 芳
 抱 月
 越中 友 知
 一 朗
 能登 洪 洲
 龜 聲

雁鳴や刈あとかくを棚田水
 川欠に只一株のすすきかな
 はつ雪や掃は紅葉の顯るゝ
 板の間に澄月冷てきりくす
 秋もまた朝寐晝寐や湯の利め
 炭やきや煙りの中に只ひとり
 日盛りや黙て居るも一仕事
 行越て見れり少き時雨かな
 流れとは知らて踏込落葉哉
 ちり残る柳の辻の小春かな
 三寅
 墨丈
 加賀甫立
 招鶯
 梅湫
 賢外
 越前香雨
 近江九峰
 洗玉
 西京犁春

音すむやかくて笥も月の友
 去年も此枝よ此花咲はしめ
 打角と晴けり月に夜の足す
 少うても名は立派也福壽草
 旅は我物にはあたり初月夜
 ひらくと風にもさくか杜若
 涼しさとはさみ出と鳧松造
 覺へても居られぬ聲や閑子鳥
 谷の闇見下す山の月夜かな
 能ほと登り坂なり初月夜
 楓城
 泰山
 柳後
 壽瓶
 連梅
 須史
 聽秋
 稻處
 大坂無腸
 南齡

見勝手な二階にも居す後の月
 散とまて音の聞へて庭の露
 雲やけの暮際のたつ寒さ哉
 先空にゆどりの付と若葉哉
 海士か子の乳あまを覺青嵐
 朝まはと雪に心の新らと
 小春日や草ゑりあける佛花
 菅太の水田過るや朝かすみ
 箏やあそふ子供も伸さかり
 水鳥の沈んで船と通とけり

阿波 芳 桂
 耕 雨
 松 年
 静 五
 梅 有
 伊勢 果 樵
 鶯 笠
 十 水
 支 仙
 似 水

梅か香の誘ひ出とけり初霞
 草も木も今宵は靡け盆の月
 さと浪や秋立けさの手水鉢
 冬の來て少くなりぬ磯の松
 梅白と野風の隙に月も出て
 冬の雨雪に替りて暮にけり
 囀りに馬の嘶きまじりけり
 膳につく膝の軽さよはつ袷
 蚊帯や七うても見る月の影
 行水に影ととめて月と萩

雪 野
 士 徳
 逸 外
 秀 竹
 史 白
 讚岐 眞 海
 芭 巨
 伊豫 桃 陽
 蘭 曉
 播磨 鐘 花

太はしや古風残せし削やう
 破るゝは大き過ての芭蕉哉
 置直す机や梅とさしむかひ
 明あらむ光りも早く福壽草
 有かうへ買ふや雪解の竹箒
 鶯のみとりひろうや小柴垣
 人のひま鳥も覗くや庭の花
 けふも雨このは櫻に何事そ
 わくら葉の纏て有や捨小舟
 帆の見ゆる家やいつ迄春寒き
 備前 鶴影
 因幡 鳥牙
 友川
 仙木
 出雲 曲川
 星洲
 美作 尾川
 笠雅
 芹雨
 静月
 雨

涼しさや柱のぬるゝ流れ先
 座に付は海は隠れて後の月
 年の花古きはまれな香り哉
 太箸のかるみや齡は重ても
 藪村や満月とても置さらし
 一聲に机叩きぬほととぎす
 雪の戸や朝から酒に膝崩す
 さむしろや置た扇の露臭き
 戸鳴子の音をりくや夜の梅
 やかて止雨押きりて渡る鴈
 備中 蛙淵
 春園
 安藝 翠石
 霞邦
 筑後 楓陰
 豊後 華跡
 周防 善秀
 豊前 晚節
 長門 梅宿
 甲斐 白隣

垣うちや薺はかり風見ゆる	飛水
端近うつゝれさせ聞月夜哉	鷹居
きりくす餘所に聞ても己か秋	水西
虹の輪も暑もさめる花野哉	守拙
月澄や寐る人は皆寐せてから	斗月
花も葉に移りかはりの袷哉	相摸雪蕉
秋風や強い物には軽うふく	蔦雄
花咲て音の和らく流れかな	芥舟
人の手も離れた音や暮の引拔	宇山
數見へて水も濁さぬ田螺哉	伊豆連水

散たまゝ客を請たる紅葉哉	駿河雪香
はつ月や心の底の新らこみ	九成
解たらは氷も暖ふ思ひけり	遠江木潤
蓬萊や子は紐付て引たかる	可然
浪先は氷る夜に似て夏の月	蕙畝
出代りや惜み惜まれすると花	十湖
うつり行世には移らす鏡餅	三河蓬宇
藪ぬこは左程思はず冬至梅	大沙
夕時雨牛はいつもの歩行哉	荷風
松に月暮る境もなかりけり	魯石

鶯に志らみてあるや枕もと
氣と留て見る夜と成ぬ秋の空

石芝
美濃竹籟

翁忌

果忘れぬ道はこの道枯尾花
人顔のもう見へぬ也移さし
ゆつくりと日の出る山の霞哉
俎の音にさひありとしの暮
山松の聲遠さける時雨かな
鳴あまたならんて波の静也
雪ちらく鍵ならし行下屋敷

羽洲
華岳
其彭
瓜田
其逸
三省
白二

潔さに言盡されす月ひと夜
笑はるゝ程着た上の紙衣哉

英齋
荷庵

寝はくれて聞覺へ晝霜の聲
着心を尋ねて見たき紙衣哉
焚ひとも見ゆれ霜夜の遠筈
大雪や日暮るゝ山と暮ぬ山
材木と扱ふ聲もとくれけり
茶の花やいつ咲つくす苔數
埋火や聞なれて居る松の聲

車友
吉甫
瓜蝶
吟松
松友
月空
一夢

藁塚に似たり枯野と一ツ家
梅つるは今か見頃よ初時雨
子供らの多い在所の小春哉
寒月やすり逢人の臭のかけ
浪おとは堤越となりふ由籠
鬼も来す鬼にも成す年の暮

錦秋
古柳
波鶴
松雨
一止
雨升

海うけて十月松の日和かな
風吹て松葉のまじる霞かな
福藁の穂先にも飛ふ雀か難

素陽
秋湖
採芝

雨風も最早いとはす實乗稻
初冬やまた茹豆の有味き年
色かへぬ松や幾世の神の庭
花鳥の世は夢なれや不由籠
ひとかくへある脱捨や更衣
裸木も濡らあふせず初時雨
更る夜や落葉の音も物凄き
御繪式の膳に乗り来る木の葉哉

棠枝
可洗
可翠
衣洲
月茶
孺鶴
梅圃
松翠

降雲の兀るもそへて初時雨

喜道

白浪のうへに跡無時雨かな
月の夜に何と不足を鳴千鳥
あくるゝや稻穂なからも藁の音
木守の柿熟とけりけさの霜
花のある限は續けこの日和
存分に花見て寒きゆふへ哉
人こゝろ動くや風に花の空
山寺や鐘の響にちる木の葉
搔揚た落葉におちぬ水の音
昇日を心の杖やゆきのはら

古 杉
秋 津
雅 風
寸 舍
晴 耕
花 道
之 文
志 啓 利
二 道
峯 月

蛸つりて早夜に仕たり草の家
茶の花や通りかゝりの貰ひ物

曉 窓
奇 陽

初雪や散松葉の姿うゝなはず
時雨るや席は不斷の黒茶碗
雪降つふりつ暮けり片山家
枯る木はかれて静や冬の雨
木枯の間にくむれる雀りな
轍みなかくれて雪の轍かな
柴橋や初雪かゝる上りくち

不 退
野 堂
清 嘯
琶 洲
梢 霞
瓢 水
葉 々

野鴉も空の鳥なりゆふ時雨

秀石

愛襲や楳の栞に聞小夜時雨

羊山

積む雪に暖ふ見へたり庭の松

杏瓶

落葉して水の溢るゝ笕かな

登水

初雪や竹に二日の月夜ほと

起山

すゝ掃や子供かこまに玉襷

里水

いさき能旭のさすや霜の上

杉林

のつと出た旭大きと雪の原

英山

風のおと氷を迂る夜明かな

静理

釣魚の鱗ひかつく小春か南

如山

峯高と晃く雪のうらおもて

鐘林

落葉して浪音遠う聞へけり

竹文

軒に船つなく在所や鴨の聲

馬耕

降る物の定らぬ空や枯尾花

杜發

月擧てさした戸に聞時雨哉

草雨

麥の葉と立ならひけり霜柱

山月

ひと釣瓶捨ても残る落葉哉

明友

田の水に濁りも浮かす初時雨

五俵

冬の月水に離れし光りかな
水仙の葉先にとまる雫かな
寒空や降なら雪にしてほしき
續く雲なくて翻るゝ霞かあ

等 文
梅 意
嘯 月
士 口

瀬木石と越す水音や冬の月
染た葉も梢にありて歸り花
鴨なくや風に明るき沖の空
初雪やみどりに残る峯の松
吹あれた夜は猶高し冬の月

其 風
雪 江
堂 亭
弄 月
五 聲

羽叩きのそれさへ寒し明の鶏
吹暮し空とは見へる冬の月
さまざまな樹や様々な雪景色
釣て來た魚焼て居る布子哉

杜 月
高 山
青 可
壽 樂

束ね菜やひと朝毎に冬深し
時雨るや蠟燭の燈の狂ひ燃
風の吹まはしけり紐ひしる
遠山の低う暮ゆく小春かな
無事なかと問はれて嬉し冬籠

鶴 羨
里 川
鏡 女
秋 船
楠 子

吹よせた色美しき落葉かな
さゝ鳴に後ちくれはとらと朝手水
馬の脊の思ひやらるゝ時雨哉
葉柳や頓てすゝとさ水移り
葉になりて猶風ふくむ柳哉
提燈に吹込風やなく千とり
水仙や皆新らしき葉也けり
重き世と譲りて輕き紙衣哉
耳遠き連はかりなり不由籠
風や撞手にもとる鐘のこゑ

鏡水
月靜
雨谷
蓬泉
墨仙
菱華
淇川
おなめ
圓司
少雲

年の夜や寐るに先たつ起心

其月

翁忌

百〆年の昔もおとふ時雨哉

立意

○附録

うくひすに訪よき竹の林哉
ぬくふ爐ふちも春に殊更
ぬるむ川澄間くゝに汲置て
馬よりうゝはらくを養ひ

羽洲
立意

曇りて晴て月の夜に近く
冬まで貯ふ冬瓜見たてる
何すると無此寺に彼岸から
温泉處と成て變る人の氣
酌させてつくく思ふ女ふり
ひそんた中と蚊さへ障らぬ
葭簾とうやら須磨の寂に似て
別火續きに護摩の手廻し
約むかる師走もいつか下り月
斧も及はぬ凍のいつかり

見て置けと云れて覗く縮堂
足駄ちくはく宿のかり物
過かゝる花の七日は夢なれや
箕につるく伸るたねいも
山隠す霞もつひに雨らとく
悉皆屋から使ひいくたひ
手たすけに近江の悴呼々へ
五俵てたらぬ棟上のもち
厄日も追々すんであきの風
見よ兎までみゆる月の輪

意 洲

おし分てむやみに通る萩芒
はら立まされ傘も引さく
何一ツ女の智恵て云勝てす
鮫煮た鍋をみるくあら砂
つくろうて田舎めかせし下邸
こゝろかたまる見龍か弟子
誇り氣にくれと團扇も紙處
のほりの舟にしらむ短夜
小ふろしき廣けて分る大包
首途に勇む日柄なりけり

桃椿さかりの花に咲つれて
たのしひ盡ぬ國の長閑さ

鹿末なるどちもの乍憚呈上貴覽に入
候不相替御交際御文音頼上候

明治廿六年十二月

立意

能つゝく日和と色に散紅葉
野から海見下す窓や初明り
いく曲りあるを谷間の梅林

御貴評頼上候

明治廿六年十二月廿六日印刷
全 年十二月三十日發行

正價 金八錢

編輯者 多田立意
愛知縣名古屋市矢場一ノ切百五番戸

發行兼印刷者 池田謙吉
全縣全市上長者町三丁目丁九十七番戸

發行所 竹林居
全縣全市矢場町一ノ切百五番戸

